

ゼミに参加して 91年度生 長谷川晶子

私は卒業したばかりだが、もうすこし勉強をつづけたいと思ったので、今年も(去年はフランス留学から帰ってきて秋から参加)巖谷先生の4年ゼミに参加させていただいた。作家アンドレ・ブルトンの大著『魔術的芸術』をとっかかりにして、この書物に扱われている太古から現代までのさまざまな芸術・文学作品の魅力を参加者全員で考えながら、人間の文化とは何かを大きくとらえなおしてみよう、というすごいゼミだった。

好みの領域や作家・作品について発表したい人が発表するという方式なので、私は以前から関心のあった現代シュルレアリスムの芸術家マックス・エルンストのコラージュ小説『百頭女』の無限の魅力について話したいと思い、まず最初に名乗りでた。発表者は私以外にも三人ほどいて、それぞれが同じテーマに別の方向からアプローチし、簡単なレポートを用意してそのコピーを配る。他の参加者にもよく理解できるように、発表者はわかりやすく考えを述べてゆくことを求められる。先生が広い視野に立って補足説明をする。

そのうちに参加者たちが「わかってくる」のが、空気の変化で感じられる。そうすると、こちらもどんどん熱中してゆく。あちらこちらから意見や質問が出る。問題が深められ、意外な方向にひろがることもある。その感じは生き生きとしていて活発で、変な言い方かもしれないが、日本の大学のゼミだとは思えないくらいだった。

巖谷先生は司会役のふりをしながら、学生が意見を言いやすい雰囲気をつくりだし、話の流れをより普遍的な方向へ、より興味ぶかい方向へと導いたり、軌道修正をしてくれたりする。そして私たちは、ときとして、もっと本質的な、宇宙や人間の秘密に触れているような気分になることまであった。

ランボーやブルトンの詩について、マグリットやデルヴオーの絵について、メリエスやブニュエルの映画について、古代オリエントやエーゲ海の芸術について、ギリシア神話や中世フランスの伝説について、毎回ちがう人が発表し、毎回新しいものに出会う。そうやって一年間つづけるうちに、私自身の世界観・人生観にも影響がおよび、いろんなことに興味がもてるようになった。私が大学院進学を考えるようになったのは、そのためでもある。

参加者の多くがそういうことを感じていたと思う。はじめから出席者が減ることはなく、途中から噂をきいて学科外・学外から加わってきた人たちもいたので、かえって人数がふえていったほどだった。

先生はゼミのあとでたくさんの貴重なビデオを大画面で見せてくださったり、一緒に食事をしながら、無尽蔵の知識と感覚をふるまわれたりした。一年のおわりには、先生とゼミの主力メンバーとで中東・ヨーロッパ旅行をする。貴重な経験をすることになるだろう。

しかし、なんだか私たちは、一年間のゼミを通じて、すでに不思議な旅をしていたような気もするのだ。

1997年1月